

## 保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人麦の芽福祉会
施設名	むぎっこ保育園
報告者（役職）	黒川久美（園長）
住所・連絡先	鹿児島県鹿児島市吉野町2 1 6 2 - 2
	☎ 099-813-7171 e-mail mugikko.hoiku@muginome-fukushi.or.jp

○タイトル（保育計画）

イキイキワクワク 遊びをとおした 身体づくり

○主な助成備品

巧技台セット

### 1. 保育計画策定の目的

乳幼児期の子どもたちの心身の成長発達にとって最も重要なのが遊び活動である。身体を思いっきり動かし、五感を使って遊び込む実体験を子どもたちに保障することが保育の中軸に据えられる必要がある。当園では、園庭を裸足で駆け回り、鬼ごっこやどろんこ遊びに興じ、木登りに挑戦する。また保育者によるピアノ伴奏のもと、さくらんぼリズム遊びを定期的実施するなど、身体を使った遊びをたっぷり行っている。こうした日常的に身体を使った遊びの実践をベースにしながら、遊び込める身体づくりをさらに追求するために、巧技台遊びに系統的に取り組む計画を策定した。巧技台は、パーツの組み合わせ方により、身体の育ちに応じて0歳から年長児まで様々な遊び方が可能である。特に幼児期の身体遊びのポイントの一つである「姿勢を制御する力」、すなわち、自分の身体が直立しているか斜めであるかがわかる・逆さや回転したとき自分の身体がどうなっているかがわかる・運動中にバランスを崩しても元に戻せる力、に關係する遊びをいろいろと体験することができるものである。

### 2. 具体的な実施内容

1) 本園は、2～5歳児の異年齢保育を行っている。巧技台のパーツを組み合わせて、2～5歳児まで一緒に遊べるようなサーキットを組み立て、それぞれの育ちに応じた多様な遊びが展開できるようにした。子どもたちの楽しむ様子から、次第に1歳児も参加するようになった。



写真①



写真②

写真①は2、3歳児が太鼓橋を渡るのを見て、1歳児が見よう見まねで挑戦しているところである。太鼓橋の両脇を両手で持ち、足を「段」の上に置いての移動は難しいと感じた1歳児は、片側を両手で持ち、足は床につけて1歩ずつ「段」をまたいで移動している。自分なりに工夫する中で、自分の身体の動かし方や運動感覚が習得されていく。2本の並行に置いたビームでは、写真②のように2歳児はそれぞれのビームの上に左右の足を置いて移動する。3歳児になると、1本のビームの上を両腕を広げてバランスを取りながら歩くようになる。さらに4、5歳児にもなれば、横に渡したビームの地面からの高さを高くして渡るようになる。



写真③



写真④

2、3歳児は4、5歳児の身体遊びの姿に憧れを持ち、「自分も！」とやろうとする姿が見られる(写真③)。一方、4、5歳児は、2、3歳児の憧れのまなざしを感じる中で、もっと「難しい技」に挑戦しようとする姿や2、3歳児を手助けする姿(写真④)があった。2歳児が巧技台の高い箱に登れない時は、おしりを持ち上げたり、手を引っ張ってあげたりなどして、登るのを援助する様子も見られた。このように、異年齢ならではの子ども同士のかかわりあい引き出された。

はじめは巧技台を保育者が組み立てていたが、運動会を経て、次第に子どもたちが自分たちでイメージを持って仲間と相談しながら組み立てていくように変化していった。子どもだけでは組み立てが難しい時には、「ここにこれをくっつけて」など保育者に依頼。自分たちで考えた巧技台遊びに満足すると、片付けも子どもたちが率先して行うようになった。はしごや「ぼるだボード」など重くて大きいものは、3～5歳児が自発的に一緒に遊ぶ姿もあった。



写真⑤



写真⑥

2) 運動会では、4歳児は「わんぱく探検隊 宝めざして出発だー!」、5歳児は「レスキュー隊 出動!」というテーマで、巧技台を使ったストーリーのある運動遊びに取り組んだ。写真⑤⑥は4歳児が高い箱の巧技台によじのぼったり、1本橋を渡る様子である。



写真⑦



写真⑧

5歳児は写真⑦⑧のように斜めのビームのぼりや、高い箱の巧技台の上から傾斜のきつい滑り台を滑り降りるなどに挑戦した。

### 3. その成果と評価

○ハイハイをするようになった0歳児や1歳児には、1～2段の箱にマットをかぶせてマット山を作ったり、滑り台と組み合わせることで、ハイハイで斜面を上ったり下りたりする遊びをたっぷり行った。近年、ハイハイで足先が床から浮いている子や掌が開いていない子が見受けられる。本園の0歳児の中にも入園当初そういう姿があったが、意識的に場を設定することで変化がみられた。斜面という「抵抗」のあるところをハイハイで上り下りすることは足の親指でできること、掌を開くこと、首を起こして前方を見ることなどを促し、後の運動発達の土台となる豊かな質をもったハイハイの動きにつながる。

○2足歩行が確立した1歳児からは、2本の並行に置いたビームの高さや幅（はじめは2本から、やがて1本へ）を調整することで、育ちにに応じたバランス感覚などを養うことができた。

○3歳以上にもなれば、巧技台の箱を何段も積み重ねて、一方にはしご、他方に滑り台を

組み合わせることによって、登って降りる感覚づくりにつながる遊びができた。登ったり降りたりするためには、バランスをとること、腕と足の動きの協応などが必要であり、こうした基礎的な力が遊ぶ中で養われた。

○4、5歳児では、何段も積み重ねた箱を左右において、そこにはしごや太鼓橋を雲梯のように渡して、ぶら下がる、はしごや太鼓橋の横棒を手で握って移動する、身体を前後左右に振る、足をかけて逆さになるなど、身体を振る感覚や逆さ感覚などの姿勢を制御する感覚づくりにつながる遊びが、子どもたちのアイデアによっていろいろと展開された。

○巧技台遊びを介して異年齢児がかかわりあう姿が随所にみられ、仲間意識が育まれていった。

○何よりも子どもたちは、自ら身体を動かす楽しさを実感し、身体を動かすことが大好きになった。

#### 4. 今後の課題と展望

まず、巧技台セットは、いろいろな組み合わせが可能であり、どの年齢段階の子どももそれぞれのやり方で運動遊びに参加することができるものである。だからこそ、園舎内でも園庭でも、もっと多様な組み合わせの下、日常的に遊べるように、巧技台の数を増やしていきたい。

次に、巧技台の組み合わせ方の工夫や新たな遊び方の発明・創造などを子どもたちと共に生みだしていきたい。

さらに、子どもの年齢段階ごと、運動発達に視点をあてた遊びのプログラムを作成したい。このプログラム作成にあたっては、目の前の子どもの姿勢・運動面や認識、自我の育ちなどについての実態を把握することが不可欠である。そしてそのためには、各年齢段階での姿勢・運動、認識、自我などの発達の道筋をあらためておさえる必要がある。これらを職員集団として取り組んでいきたい。

以上